

Web版

一本道

第6号
通巻第76号

【本誓寺講演録】

令和六年十月二十五日 報恩講より

「一瞬、一息、一声の称名念仏」(第四回)

金沢教区三上組 浄土寺住職 大窪康充 先生

それでは後半のお話ですが、もう少しお付き合いしていただければと思います。

ここ本誓寺さんの住職がね、法話をできるだけ長く話せと言うのですよ。だけど話を聞く集中力は、私は長くて四十分ぐらいただと思っっているのです。長ければいいというものではないですよね。うなずいておられ方がいます(笑)。よかったです。

これは私への自戒の念として何度も言いますが、今日という日はもうないですよ。みなさんとうちやうってね、令和六年十月二十五日の時間を一緒に共有できることは、もう二度とありません。本当に貴重な一瞬だということです。

さて、ある九十歳過ぎの女性のご門徒の話ですが、次のように言われました。「念仏って、本当に現実的ではないわね。念仏すれば救われる？ 何がどう救われるのよ……」。その方は何ごとにも前向きで、毎日、身体や食事の内容に気を遣い、元気で過ごされていました。まあ、自分を信じて懸命に頑張れば、たとえ困難なことがあっても何とかなる。いわば「なせばなる。なさねばならぬ。何ごとも」をモットーにして、これまで頑張ってきたのだなあ、という印象を受ける方でした。

ところが、九十二歳ごろを過ぎると、だんだんと無理ができなくなったと言うのです。歳には勝てないと言わんばかりに、少しずつ床に伏せる機会が増えてきたのです。そんな彼女が言いました。「まさかこんなことになるとは思わなかった」。彼女にしてみれば、一生懸命に努力して頑張っていれば、いつまでも病氣にならず元気で過ごせる、そんな風に思っていたのでしょうか。まさかこんな風に寝込むとは、元気に過ごしていた彼女にしてみたら、この身の事実はなかなか受け入れがたいものがあつたのでしょうか。

頭の中では、老い、病み、死んでいくわが身だとわかっていても、懸命に努力すれば、いつまでも若くて病氣をせず、ずっと長生きできると思ひ込んでいる、否、思うようにしていたと言うのでしょうか。でも実際は、だれもが人生の上り坂、下り坂、そして真逆の坂を渡っていかねければなりません。それ故に先ほどの話ですが、皆さんは、どちらが現実的な教えだと

思いますか？ 何ごとも懸命に努力すれば、いつまでも若くて病気をせず、ずっと長生きでいられる、それを目指していく救いが現実的なのでしょうか。それとも、いずれは老・病・死する身であれば、その苦しみ悲しみを通して、尊いものに目覚め、教えに出あい、そして人と共感し出あい直していける、そんな救いが現実的なのでしょうか。念仏の救いは後者であり、念仏ほど現実的な救いはないと思います。

私もそうですが、みなさんは明日も多分生きているだろうなと思っていませんか。本来、道理的には、明日は生きているのかわからない、人間いつ死ぬかわからないと言えますよね。でもそれが、なかなか自分のこととして入ってこないのではないのでしょうか。それがまた、念仏の教えを現実的なものとして受け止められない理由でもあるのでしょうか。

私の両親がまさにそうでした。父親が九十歳ぐらいの時に補聴器を買ってあげた時のことです。正直に言いますが、四十万円もしましたよ。それでも、きちんと会話ができれば、こちらもう少しは楽になるし、父親も会話に入ってきて有意義な時間を過ごせるかなと思って買ってあげたのです。でも、補聴器をつけていたのは、一週間でした。ある日、補聴器をつけていない父親に母親が気づいたのです。母親は叱ったのですよ。「あんた、せっかく買ってもらった補聴器、なんでつけんがや。ちゃんとつけなさいよ」と。その時、父親は次のように言いました。

「あんなもん、年寄りくさい！」と。母親は血相を変えて、「あんた、九十歳にもなっていて、そんなこと言うわね！」と大声を出していた光景がとても記憶に新しい。その次の日です。これは本当にあった怖い話ですよ（笑）。たまたま足をひきずって歩いていた母親が父親の目に入りました。そのすがたを見て父親が言いました。「おまえ、危なっかしいわ、ちゃんと杖をつけ！」と。すると母親が言いました。まさしく「そんなもん、年寄りくさい！」と。その場に居合わせていた私と連れ合いは目が点になり、ことばが出ませんでした。「年寄りくさい」、これが九十歳と八十四歳の人間から出てくることばでした。

これは笑い話のようであっても、決して他人事ではないのかもしれない。なかなか素直に老いを受け入れられない、それをもまた現実なのでしょう。だけど、父親は九十三歳の時、一瞬、家の中でバランスを崩し、転んでしまって大腿骨折です。もしも杖をついていたら防げていたのかもしれない。家の中にいても、ちょっとしたことでバランスを崩す、そして転んで大腿骨を折って車椅子の生活が始まりました。母親も然り。松任駅で転んで救急車で病院に運ばれました。大腿骨を骨折して、それから身体の調子が悪くなったのです。「転ばぬ先の何とやら……」ではないですが、頭の中ではわかっているのでしょうか、見た目を気にしたり、自分はまだ大丈夫だと思い込んでいて、なかなか素直に老いる身を受け入れられない、それは決し

て他人事ではないと思います。

なかなか苦しい現実を受け入れられず、そのために懸命に努力をして功德を積み、自分の理想の世界が開かれる、それはまさしく夢物語です。でも心配しないで下さい。私が描く夢物語ではなく、菩薩の夢物語によって私たちにとっての理想の世界はすでに完成されているのです。法蔵菩薩の四十八の願いによって、五劫という思惟を経てその願いが成就され、理想の世界、いわば浄土が完成されているのです。その理想の浄土から、欲望がドロドロとまみれている厳しい現実、いわば現実的な穢土（娑婆世界）にしっかりと立って生きなさいと願われている。あらがうこともなく、流されることもなく、しっかりとその穢土に立ち続けることによって開かれる新たな世界、そして聞こえてくる他者の声がある。それが念仏の声となって、この私に届けられているのです。

私自身がそうですが、高度経済成長期の中で、なにか突っ走ってきたという感はありません。より便利に、より快適に、より清潔に、より早く、より多く、そんな右肩上がりの数字を追いかけて、その恩恵をこうむってきたと言ってもいいのかと思います。みなさんはいかがですか。振り返れば、その高度経済成長期において、生活は便利になった、そして物は豊かになった。でもその一方で、失ったものもいっぱいあったかと思うの

ですが、いかがでしょうか。

生活は便利になり物は豊かになったその一方で、自然の豊かさが奪われたということはないでしょうか。私の少年時代は、川には魚やザリガニ、ヤナギの木等にはクワガタやカブトムシがたくさんいました。自然の中で戯れ遊んだことが一番の思い出になっています。

あるいは、時間の豊かさはどうでしょうか。今は新幹線やリニアモーターカーなどで、何分、何秒を競い合っていますが、それが本当の豊かさなのか。昔は、もう少し時間がゆったり流れていたと思います。少々時間のずれがあっても、ちゃんと待っていてくれる人がいました。そこには、何ごともお互いを気づかう人間関係の豊かさがあったように思います。

あるいは、表情や感情の豊かさはどうでしょうか。笑ったり泣いたり、孫たちのそんな表情を見ると、なぜか心が和みます。以前、久々に松任駅から電車に乗ったら、学生さんをはじめ、みんなスマホを見ていました。そのすがたが、まさに位牌をじっと見ているかのごとく、みんなかたくなな表情をしていました（笑）。

たくさんの方を訪問されたカトリック教会の修道女 **マザー・テレサ** という方が言われています。「日本ほど物質的に、あるいは環境的に恵まれている国はない。けれども日本ほど表情がない、そういう国民は他にはない。心が貧しい」と、はっきりおっしゃっているんですね。それは、信仰心がないからだ、と

まで言われています。

みなさん、ブータンという国を知っていますか。インドの方にある、仏教徒の国ですね。その国は、世界一幸せな国だと言われている。笑顔が満ちた国というのでしょうか、顔施（相手に笑顔を施す）によって、みんなが幸せになる国でした。なぜ笑顔が絶えないかと言えば、「今日、雨風をしのぐ家がある。今日、食べるものがある。今日も家族がいる。これ以上、幸せなことはない」と口をそろえて言っていたテレビの放送が忘れられません。それ故、世界の幸福度ランキングでつねに上位でした。ところが二〇一九年、今から五年ほど前ぐらいから、ちよつと雲行きが変わってきたのです。なぜかと言えば、ご存知のようにインターネット、SNSというものが世界で流行りだし、ブータンの国にもさまざまな情報が他国から入ってきたのです。今まで他国の情報なんか入ってこなかったのですが、若い人がね、その情報によって自国と他国を比べるのですよ。すると、「自分の国ほど貧しい国はない」と思い始めたのです。それ故、世界の幸福度ランキングの順位が、以前は一六〇カ国中トップに近かったのですが、一〇〇位近くに落ち込んだらしいのです。

先ほど「目覚め」という話がありました。改めて私たちは、何に目覚めるのでしょうか。何か特別なことに目覚めるとか、

他人にはできない高度なものに目覚めるというのではなく、誤解を恐れずに言うならば、自分の誤りに目覚めることだと思えます。尊い目覚めは、自分の歩んできた道を振り返り、素直に修正できる力をたまわることです。

そこで、昨年も話した内容で恐縮なのですが、『阿弥陀経』の主人公って、皆さんだれだか覚えておられますか？ お経を聞いているときに、一番響いてくる声、「シャーリホー」ですね。いわゆる舍利弗さんです。この人は、言ってみれば釈尊の一番弟子です。あるご門徒が言われたのですが、「シャーリホって、人の名前だったのね。私はシャーリって聞こえていたからお米とかお骨に呼びかけていると思っていたのよ」と。「なるほどなあ」と、ある意味、感心させられました。そんな一番弟子である舍利弗は、たくさんおられる仏弟子の中で、最初に自分の誤りに気づいた人だと言われています（『法華経』より）。そもそも舍利弗をはじめ、仏弟子というのは、知識や能力があるが故に、言ってみれば自己完結している人なのです。自己完結しているとは、何でもわかったことにしてしまつて、他人の話聞かない、他者から学ぼうとしない人になっていくことです。この舍利弗という人は、仏弟子の中でも一番優れている人です。実家は大金持ちで、階級は一番上のバラモン階級であり、いわば超エリートです。そんな舍利弗に向かって、釈尊はただ念仏を称えなさいと説いているのですが、舍利弗は終始一貫して無言でした。それが『阿弥陀経』という經典の中身です。

ずっと無言のままにいる舍利弗に対して、釈尊は「於汝意云何」、「汝の意に於いて云何」、「舍利弗よ、あなたのところにおいてはどうなのですか」と問いかけている場面があります。

すなわち、阿弥陀さんをなぜ阿弥陀さんと呼ぶのですか、阿弥陀仏さんと呼ぶその所以がわかっていますか、という問いかけです。『阿弥陀経』に述べられている内容は、過去からずっとつながっている、そして未来永劫へとつながっている「いのち」のつながりがある、また、すべての人々をさまざまなく照らしている「光」がある、そんないのちのつながり、さまざまのない光を象徴して、阿弥陀さんと名づけているのですよ、と釈尊は説くのです。ところが、そんないのちのつながりを切り、さまざまのない光を遮っている人が、この世の中にたった一人だけいる。それは他でもない、舍利弗よ、自己完結して何でもわかったことにしているあなた自身ではないのですか、という釈尊の「於汝意云何」の問いかけなのだと思います。そんな阿弥陀さんを遮っているのは、無論、舍利弗だけではなく、私たち一人ひとりにほかなりません。この『阿弥陀経』の「シャーリーホ」「シャーリーホ」という呼びかけを通して、私たち一人ひとりにも呼びかけられているのです。念仏を称えることによって、阿弥陀さんのいのちと光を受け入れなさいと、阿弥陀さんの声を聞きなさいと。

そして次に、耳にしたことがある方もおられると思いますが、

「俱会一处」、いわば俱に一つの処で会うという教えが説かれています。浄土真宗の念仏の救いとは、俱に救われることです。決してひとりで救われる教えではありません。舍利弗は、自分だけの救いのために、出家して戒律を守り、禅定を学んで一生懸命に修行されました。阿難や目連をはじめ、声聞と呼ばれる仏弟子も同じです。自分ひとりの救いを目指していた人たちです。けれども、『阿弥陀経』が説く念仏の救いは、俱に救われるということなのです。が故に、本当に難しいことなのです。気の合う仲間同士で、「今日、みんなで飲みに行こうか」、「一緒に遊びに行こうか」、そんな俱にという話ではありませんよ。俱にという救いは、どんな人に対しても隔たりなく、相手の存在を尊重し、違いを認め合うことです。尊重し違いを認め合うからこそ、対話が生まれ、時には厳しくも批判すべきことがあれば批判していく、そんな信頼関係によって成り立っている間柄となるのです。

改めて気づかされるのは、仏教がもつとも基本とする人間関係は、親と子の関係だと思っています。『観無量寿経』の序分は、親子関係のトラブルから始まります。子どもが両親を殺めようとする悲劇の物語です。それから、阿弥陀仏の四十八の本願の中で、もつとも根本とする第十八願の中には五逆罪（注）の問題が説かれています。だれもが心のなかで両親を排除するという問題であり、その問題を乗り越えることによって人は自立し

ていけるという内容だと思います。この「俱会一処」という教えは、親子関係を無視しては成り立ちません。今現在においても、犯罪が起こっている六割は家族関係だと言われています。時代の変遷によってか、巷できちんと法事をつとめる人が少なくなりました。法事をつとめようとしても、キーワードは「簡単に」です。それは、親子や祖父母との関係、そして親戚関係やまわりの人間関係の希薄さからくる所以だと思います。

(注) ①父を殺す(排除する)、②母を殺す(排除する)、
③仏弟子・聖者を殺す(排除する)、④仲間の和を乱す、⑤仏身より血を出だす(だれもが仏になる身に
対して暴力を振るう)。

私自身の戒めとして言いますが、親をないがしろにすることは、結局、自分自身をないがしろにすることです。私は三年前に母親を亡くしたのですが、いまだに母親を認められません。いろんなことがありました。いまだ親を受け入れられないということとは、私自身を受け入れることができない、それ故、苦しいのです。本当に辛いのです。だからこそ、形・儀式から入る法事を大切したいという思いがあります。生前いろんなことがあってぶつかってきた、それでも一周忌、三回忌、七回忌という儀式を通して、少しずつ亡き人と出あいなおしていく、共感していく。そうして故人を仏さま(目覚めた人)として仰いでいくということが、私自身の目覚めの救いとなっていくの

だと思っています。そういう意味では、この「俱会一処」というのは、大事な救いをあらわすが故に本当に難しいことなのです。

第五回に続きます。



講師紹介 おおくば 大窪 康充
こうじゅう

昭和四十年石川県白山市(旧松任市)生まれ。金沢教区第三上組浄土寺住職。大谷大学大学院博士後期課程満期退学。真宗大谷派擬講。金沢教区教学研究室元室長。金沢真宗学院前指導主任。著書に『念仏の音が聞こえるとき』『正信偈』『歎異抄』との対話(法蔵館)、『念仏の音が室と
なるとき 生活にいきる『教行信証』のことば』(法蔵館)、『合利佛の物語 阿弥陀経の黙った主役』(京都月出版)など。